

第3回勉強会で出された主な課題・意見等

大分県拠点

日時：令和4年6月17日（金）14：00～16：10

場所：九州農政局大分県拠点会議室

参加者数：27名

（農業者、農業法人、企業（電力）、日本政策金融公庫、生活協同組合、農業団体、短期大学、自治体、森林管理署、大分県拠点）

有機農業の推進（生産、経営方針、物流、販売）、カーボンニュートラルの推進、エリートツリー
--

《有機農業の推進（生産、経営方針、物流）》

- 有機農業の課題の一つに多品目栽培により栽培工程が多岐にわたり、ほとんど手作業であるうえに販路開拓ができないことがあるが、当方は品目を絞ることにより（60品目から10品目）、販路開拓等はしやすくなりロットも確保できた。また作業等もしやすくなり機械化も進んできている。
初めの2～3品目を減らすときに相当な勇気が必要だが、減らしてみると、こんなに楽になるのかと驚いた。多品目栽培よりも、少品目栽培の有機生産者を増やす方向が良いと考える。（農業者）
- 先々は少量でも流通に乗せられるような仕組みを作りたい。もっと県内の有機生産者を増やして大分県の有機農業を発展させたいが、物流が課題になっている。当社は独自の物流ルートを持っているが、大分県内の有機農産物は、全然、市場に流通していないという市場関係者や生産者からの声があるので、大分県内で小回りの効く物流（集荷）体制を構築していきたい。（農業法人）
- 全農の青果センターはカーボンニュートラルに取り組まれている。大分県は少量多品目の生産体系であるため、都市圏へ輸送する際にトラックに空きスペースができるが、青果センターへ集約しトラックに満載、コールドチェーンにも取り組むことにより、トラック輸送の効率化ができた。このトラックに有機野菜を混載できれば、有機野菜で問題となっている宅配運送費の負担が減少し、省エネになると考えている。それぞれ経営の考えがあるので、手を結べるところだけでも取り組んでいただき、前に進んでいただきたい。（大分県拠点）
- 有機栽培は、なかなか単位面積当たりの収入が得にくい、労働力がかかる中で、人件費の問題など色々あると思うが、有機栽培はこれから間違いなく必要となるので、デジタルを活用して気候変動に応じた収量規模とかのデータを収集・管理し、人間の知恵とアイデアでどう活用するか考え発展させていっていただきたい。
有機農産物の物流については、物流会社も例えば明日は50トン出荷できる、明後日は出荷なしとかでは困るので、物流業者と生産者の間でデジタルを活用しながら効率化を図ることも考えていく必要があるのではないか。（日本政策金融公庫）

- 当生協は、宅配事業の配送トラックを120台所有し、配送箇所は1週間で62,000箇所である。生産者には生産にだけ集中していただき、物流に関しては生協の配送後の空トラックに農産物を集荷できないかどうか内部でもそのような話が出ている。しかし、具体的なところはこれからというところ。(生活協同組合)
- トラックの空荷はもったいない。空荷を無くすというのが効率化には絶対必要だと思う。野菜バスやデマンドバスのように、拠点、拠点を作ってその拠点までは生産者が持って来て、集荷するという形がうまくできないかと考えている。トラックが空荷だから集荷するということではなく、集荷が計画的にかつ効率化ができないものかと思っていますところ。(大分県拠点)

《有機農業の推進（販売面）》

- 価格が高ければ、例えばポイント制での還元など、消費者にメリットがないと購入されにくいと考えるがどうか。
もう1点、県産品チラシについて、ある程度のロットをまとめようとすると欠品が発生すると思うが、例えば、有機農業者と話し合い余裕を持ったロットで県内向けのカatalogを作れば欠品は発生しにくくなると思うが、どうか。スポット販売で上限1,000個売りなどは可能か。(大分県拠点)
- 消費者へのメリットについて、現行はポイント付与を店舗で実施中だが、カatalogではそこまで至っていない。組合員から「宅配にもポイントを付けて欲しい」と要望があり、現在検討中。将来的には単品ごとにポイントを付すなどのメリットを打ち出すことも十分考えられる。
カatalogを使って、有機栽培や生産者のご苦勞を伝えるのもよいと考える。天候の関係で生産も多少することもあるので、バランスを見て生産数量と予測数量をいかに近づけるかが課題。
また、牛乳や卵などは利用登録制度という毎週決まった品目を決まった数量届ける制度があり、発注のブレが少なくなる。農産物については収穫時期によるところがあるので難しいかもしれないが、この制度が使えればと考える。
スポット販売の上限については、生産者に協力いただき、注文からの期間が確保できれば対応可能である。特に年末はそうに対応している。(生活協同組合)
- 当生協では、CO2をどれだけ減らせたかをポイント化（フードマイレージの取組）している。このポイントは、貯まっていくだけで特に何かに使えるというわけではないが、「これだけ二酸化炭素を減らすのに貢献したんだ」ということを組合員が納品書で確認できる取組となっている。(生活協同組合)

《カーボンニュートラルの推進》

- 確かにエシカル消費やSDGs等は、マスコミ等で目にする機会が増えてきて消費者の意識も高まっている。私達の上の世代より若い世代が強く意識して行動に移しているように感じる。

もう1点、アンケート等を見ると「有機農業は農薬や化学肥料を使わないから安心だ」という意識が消費者にはある。環境に負荷をかけない農業だということが、今一步、消費者に届いていないのではないか。そういう所のPRを安全・安心に加え、強くやっていく必要があるのではないかと。(自治体)

- やはり消費者意識の改革が必要だと思う。カーボンニュートラルは、生産者や流通業界も一生懸命取り組むが、私たちを含め消費者自身が意識に目覚め取り組むことで達成できる。(短期大学)
- 消費者にカーボンニュートラルを広げていくことがとても大事なことです。消費者や生産者、流通業者の方と一緒にカーボンニュートラルに取り組んでいきたい。2030年までに配達トラックを電気自動車に変えることにしている。自分たちでできることをどんどん探してCO2をできるだけ減らし、緑の地球を緑のまま未来に渡していきたい。(生活協同組合)

《エリートツリーについて》

- エリートツリーは従来の樹木より生長が1.5倍、杉の場合なら花粉量が少ない、材質も材木利用ができる、まさにうってつけの樹木だと思う。国の森林総研で開発・普及されつつあるが、有機農業も光合成によって炭素の固定を行うように、持続的に炭素の固定ができるエリートツリーの植樹活動もカーボンニュートラル達成のため積極的に県民運動として取り組んで行く必要がある。(短期大学)
- エリートツリーは、通常の苗木よりも1.5倍から2倍位の早さで成長するというDNAを特定し(優良な個体を人工交配し選んだもの)生産・普及させる国の事業で、成長がよくて花粉が少ないハイブリット苗を大量に生産して民間への普及が計画されている。また、森林では鹿による食害が大きな問題となっている。鹿の食害範囲は地上1.2メートル位までであるが、エリートツリーの植樹によって早く食害範囲を超えてしまえば防護柵等をする必要がなく下刈り作業も減らすことができるなど、カーボンニュートラルの面でも貢献できる。

昨年度来、ウッドショックで木材価格の高騰が続いている。外材がいろんな原因で輸入されなくなり国内産の需要が高まったということ。木材価格が上がった分、林家が短期的な現金収入のために伐採をするようになってきた。伐採することは国産材の流通、利用の関係ではよいが、一部において、伐採跡地の放置または大面積伐採跡地を天然更新(人工苗木を植えないで天然の力で森林を再生させていくやり方)に頼っている現状があり、国としては植栽による再生林を進めているところ。森林は農業と深く関わっており、森林に降った雨は、土壌を伝って地下水、河川に流れ、豊かな森林を造ることによって農業が栄えてくる。森林施策により貢献していきたい。(森林管理署)

- エリートツリーの植樹により、鹿がその他の場所や植物に餌を求め、荒らしたりはしないか。鹿を間引き(駆除)すれば生態系の多様性を損ねることにならないとか懸念されるが、人間と共存する形で生態系をうまく循環していく方法であれば素敵な

未来だなと思う。(生活協同組合)

《大分県拠点あいさつ》

- 勉強会は今回で3回目となるが、実はその裏側で私どもと課題を出していただい
た方で取組をいくつかやっているの、紹介させていただく。

エリートツリーの話も出たが、間伐、伐採した後を森に戻していくのは大変な年数
が掛かる。荒廃農地に植林できないかと農業委員会に相談に行ったりしたが、足踏み
状態になっている。また動き出してお話できるような形になったら報告したい。

また、地域資源循環型というものをしっかりやろうということで、チモシーの試験
栽培をしている高校生達と話をしてこの場で発表してもらおうと考えている。うま
くこの取組が回れば、高校の取組から一般農家に広げていけないかといっている
ので、そういったものも今後報告したいと考えている。

今回のテーマである共同出荷や物流の関係も、JA全農おおいたの青果センター
へ出向き話をさせてもらった。できるだけ国として支援していきたいが、補助金は公
募なので私どもで付けられるというものではないので、側面からの支援やアドバイ
スをさせていただく中で、共同出荷体制や物流のネックの問題解決に結び付けてい
けたらいいと思っている。

また、有機農業はとても作業が大変な面があるので、その解決策の1つとしてドロ
ーンの利用を考えている。新聞でも報道されたが、水稻栽培の種蒔きから草取り、追
肥、最低限の防除をドローンでやろうと考えている。3年間の実証をやろうとしてお
り、今年1年目の米の収穫が終わったら、報告会をしてもらおうと考えている。また
課題も見つかるだろうから、いろんなところでいろんな方々のアドバイスをいただ
きながら、お知恵をいただけたらいいと考えている。

バックグラウンドでのいろいろな動きと並行しながら勉強会を進めているので、
引き続きご支援の程をお願いしたい。

(以上)